

市道戸切通線工事に伴う 発掘調査報告書3

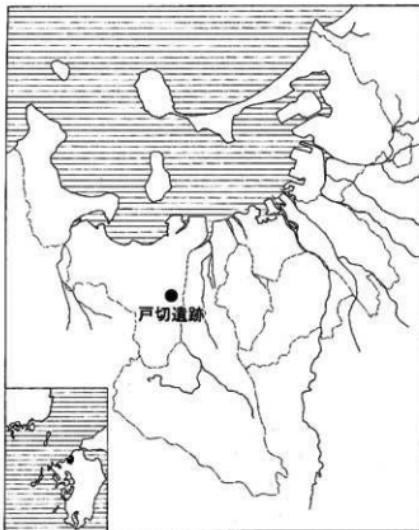
とぎれ
—戸切遺跡第6次調査の報告—

2012

福岡市教育委員会

市道戸切通線工事に伴う 発掘調査報告書3

—戸切遺跡第6次調査の報告—



遺跡略号 TGR-6
調査番号 1104

2012

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えた福岡市には数多くの文化財が存在しています。それらは本市のみならず国のかけがえのない財産であります、開発によりやむを得ず失われる埋蔵文化財については事前に記録保存調査を行い、後世に伝えるようつとめております。

本書は市道戸切通線の道路改良事業に伴い実施した戸切遺跡第6次調査の成果を報告するものです。周辺は弥生時代から中世にかけての集落遺跡が点在していますが、それらの中には本事業に伴う確認調査によって、新たにみつかった遺跡もあります。

本書で報告する調査は小規模なものでありましたが、古墳時代中期の竪穴住居などがみつかりました。戸切遺跡は古墳時代の集落を中心とする遺跡ですが、今回初めて、中期に遡る住居跡がみつかり、古墳時代集落の歴史的変遷を明らかにすることができました。

本書が埋蔵文化財保護に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用いただけることを心より願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた道路下水道局、戸切人権のまちづくり館、地元住民の方々をはじめ、関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 24 年 3 月 16 日

福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

例　言

- 本書は福岡市教育委員会が市道戸切通線戸切道路改良事業に伴い2011（平成23）年度に実施した戸切遺跡第6次調査の発掘調査報告書である。
- 調査と整理は森本幹彦が担当した。実測・撮影等の作業を行った者は以下の通りである。
遺構実測・製図・撮影：森本
室内整理作業：篠田千恵子、下山慎子、田中ヤス子、八木一成（整理補助員）
遺物の実測・製図：森本
- 調査の基準座標は調査区の形状によって任意に設定したものであるが、戸切通線道路改良事業に伴い設置された基準点によって国土座標（世界地図系）の測量も実施している。本書で用いている方位記号は全て座標北である。
- 本報告の出土資料および記録類は平成24年度に埋蔵文化財センターで収蔵保管する予定である。

戸切遺跡 第6次調査		遺跡調査番号	1104
地番	福岡市西区戸切3丁目17	遺跡略号	TGR-6
分布地図番号	92 戸切	調査面積	62㎡
調査期間	2011(平成23)年5月9日～2011(平成23)年5月20日		

本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経緯·····	1
2. 調査の組織·····	1
II. 遺跡の立地と歴史的環境·····	3
III. 調査の記録·····	5

挿図・写真目次

Fig.1 戸切遺跡周辺の遺跡分布と市道戸切通線工事計画図 (1/7500) ······	2
Fig.2 戸切遺跡の調査地点 (1/1000) ······	3
Fig.3 第5次調査出土の古墳時代中期の土師器 (1/6) ······	4
Fig.4 第5次調査051(溜井)出土の古墳時代後期の土器と木器 ······	4
Fig.5 遺構配置図 (1/100) ······	5
Fig.6 基本土層図 (1/30) ······	6
Fig.7 003 (古墳時代中期の堅穴建物)実測図 (1/30) ······	6
Fig.8 出土遺物実測図 (土器1/3、石器2/3) ······	7
Ph.1 2区全景 (東から) ······	8
Ph.2 4区全景 (東から) ······	8
Ph.3 1区全景 (東から) ······	9
Ph.4 3区全景 (東から) ······	9
Ph.5 003 (北東から) ······	9

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本書で報告する戸切遺跡の発掘調査は市道戸切通線(戸切)道路改良工事に先立って実施されたものである。

2007（平成19）年1月、福岡市土木局道路建設部（現・道路下水道局建設部）から教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ工事計画地の埋蔵文化財について事前審査の依頼があった。当課では計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地および隣接地を含むことから、対象地について遺跡の遺存状態を確認するための調査が必要であると判断し、当局と協議を重ね、掘削可能な地点から試掘調査を実施することとなり、同年の6月から随時、調査を行った。この試掘調査の過程で、新たに明らかになった埋蔵文化財の遺存範囲があり、各地点の旧小字名をとって、上籠遺跡、兵庫遺跡として、周知の埋蔵文化財包蔵地に登録した。

計画地内の工事と試掘調査は2007年度から2011（平成23）年度にかけて、並行して進められたが、発掘調査の実施は2007年度、2008（平成20）年度、2011（平成23）年度である。

本書で報告する戸切遺跡第6次調査は、道路拡張予定地の試掘調査を2011年2月2日に行い、遺構や遺物の散布を確認したため、対象地全体の発掘調査を実施することとなった。同年4月22日に現地協議を行ったが、当局と工事業者との間の連絡調整不足のため、対象地の西端約10mに排水路の工事が先行して入っており、その部分の遺構面がすでに失われた状態であった。発掘調査はその残りの敷地を対象として、同年5月9日～同年5月20日に実施した。市道戸切通線工事に伴う発掘調査と整理報告は、この調査をもつて終了である。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託	福岡市道路下水道局建設部
調査主体	福岡市教育委員会
教育長	酒井龍彦
文化財部長	藤尾浩
調査総括	文化財部埋蔵文化財第2課課長 埋蔵文化財第2課調査第2係長
庶務担当	田中壽大 菅波正人
事前協議	埋蔵文化財第1課 埋蔵文化財第1課事前審査係長
事前審査係	井上幸江 宮井善朗
調査担当	阿部泰之（前任） 今井隆博 森本幹彦

II. 遺跡の立地と歴史的環境 (Fig.1)

戸切遺跡が位置する早良平野は、西側を背振主稜から北に派生した西山・飯森・高祖山地に、東を同じく北に派生する油山山地と更に北に延びる飯倉台地によって画され、中央部には背振山地を源流とする室見川が北流し、博多湾へと注いでいる。平野の北辺には姫浜をはじめとする第三紀層の小丘陵群が散在し、これらを繋ぐように砂丘が形成され、背後には沖積低地が広がっている。また、両山地の山麓部や平野中央部には中位段丘下位段面が残され、小田部台地にはこの上位の火山灰層が残存している。低位段丘の多くは室見川の扇状地平野・三角州平野部に埋没している。

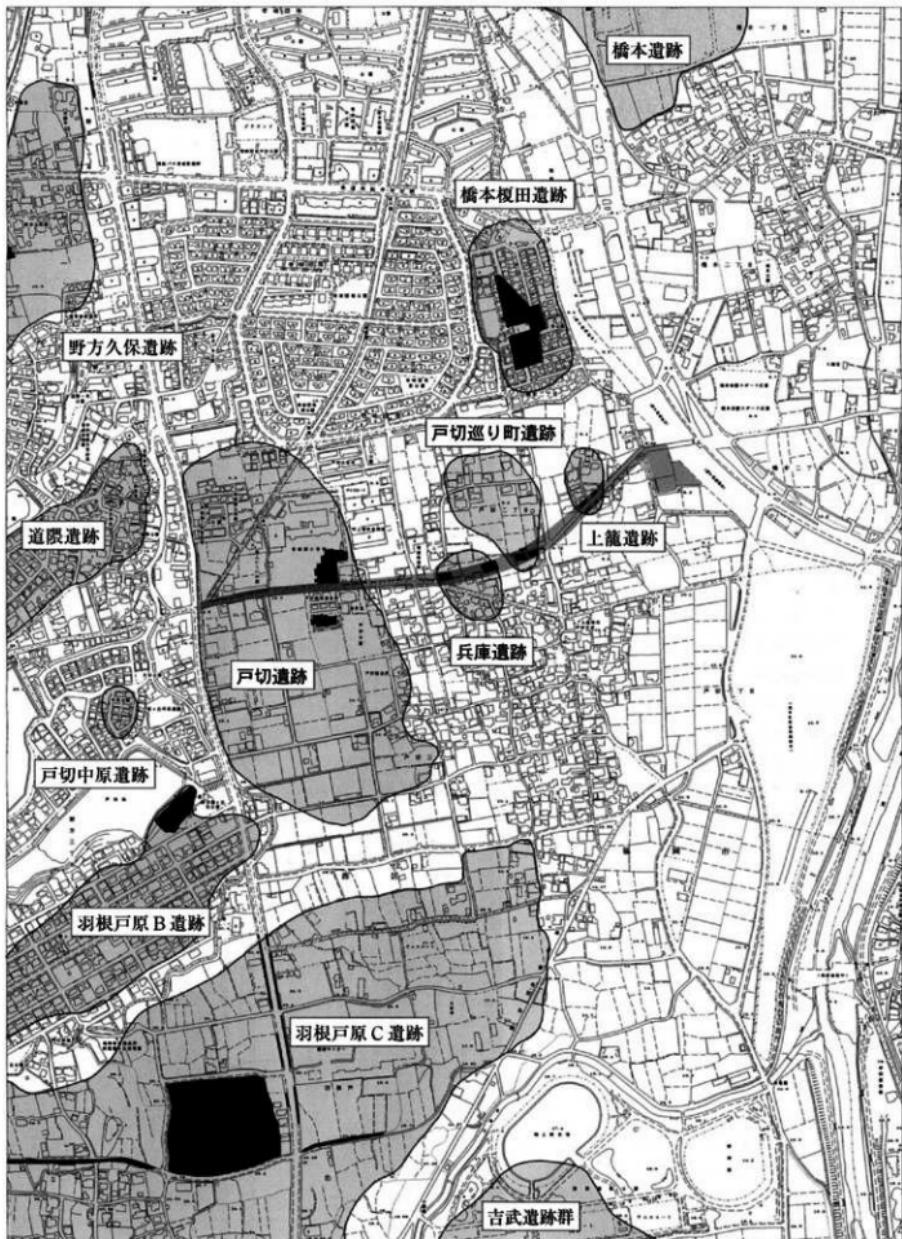


Fig. 1 戸切遺跡周辺の遺跡分布と市道戸切通線工事計画図(1/7500)

戸切遺跡は室見川中流域西岸で名柄川、十郎川の沖積低地間に、これらに開拓された低位段丘礫台地の残丘上に立地する。標高は9~14mである。古代の早良郡・平群郷に比定される地域に当たる。これまでの調査で戸切遺跡からみつかっている遺構・遺物は古墳時代中期から後期が主体であるが、早良平野における古墳時代までの歴史的環境について簡単にみていきたい。

早良平野の旧石器時代は各遺跡から表面採集の遺物が知られており、有田遺跡の調査で石器包含層が検出されたほか、吉武遺跡群の調査でも出土している。縄文時代では、草創期から中期の遺跡はまだ不明確であり、後期を主体とする四箇遺跡の調査が最初である。平野の沖積低地部では夜白式単純期から弥生時代初頭の初期農耕期の遺跡が多く分布する。有田七田前遺跡では多量の夜白式期の遺物が、有田遺跡では台地上に弥生時代初頭の環濠集落が、免遺跡では平野内で最古の突堤文型の土器が多量に出土し、橋本一丁田遺跡では夜白式単純期～弥生時代初頭の河川から土器・木製農具等が多く、拾六町ツイジ遺跡では弥生時代初頭の土坑から木製農具等が出土し、拾六町平田遺跡では家形土製品が出土している。また、平野東部の東入部遺跡では夜白式の大型壺を組み合わせた晩期末の埋葬遺構が検出されている。

弥生時代になると遺跡数が増大するが、前期初頭には有田台地に環濠集落遺跡が出現する。この集落は200×300mの規模なもので、早良平野における前期最大の集落である。このほか前期の遺跡としては、十郎川に面する沖積地上に位置する石丸古川遺跡があり、突堤文土器をはじめ多くの遺物が出土している。この時期の埋葬施設は有田遺跡をはじめ海岸部の藤崎遺跡、平野中央部の田村遺跡などで調査されている。前期末から中期初頭の集落遺跡は平野全域に拡大しており、戸切遺跡周辺の兵庫遺跡では、当該期の掘立柱建物、家畜小屋とみられる壁立建物、貯木施設などがみつかっている。埋葬遺構は藤崎遺跡、吉武高木遺跡、東入部遺跡などにみられる。中期から後期の遺跡は野方中原遺跡、野方塚原遺跡、野方久保遺跡などが近隣で知られている。

古墳時代の集落遺跡は、平野の低地部や低位段丘部に戸切遺跡・湯納遺跡・拾六町ツイジ遺跡・四箇遺跡・原遺跡・田村遺跡・免遺跡・次郎丸高石遺跡・重留村下遺跡などが位置している。戸切遺跡周辺の低地部の古墳時代集落は古墳時代中期から後期が主体である。海岸の砂丘上には生ノ松原遺跡・西新町遺跡などがみられる。室見川の中流域西岸の山麓部から広がる中位段丘や下位面の残丘上には吉武遺跡群や、野方中原遺跡・野方久保遺跡・羽根戸遺跡・太田遺跡・広石C遺跡・都地遺跡・金式城田遺跡・浦江遺跡・浦江谷遺跡がある。東岸の段丘や下位面残丘の台地上には有田遺跡・飯倉遺跡・野外遺跡・梅林遺跡・東入部遺跡が分布しており、その上流に集落は展開していない。

平野の東側丘陵部および西側丘陵において数多くの群集墳が存在するが、野方や羽根戸の古墳群は戸切遺跡の古墳時代集落と関連性があると考えられる。海岸部においては方形周溝の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の隨塚古墳や押冢古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも中期から後期の古墳群が調査されている。また、重留遺跡東側丘陵上の重留古墳C群の調査では6世紀前半の須恵器窯が検出されており、周辺に供給されていた可能性がある。

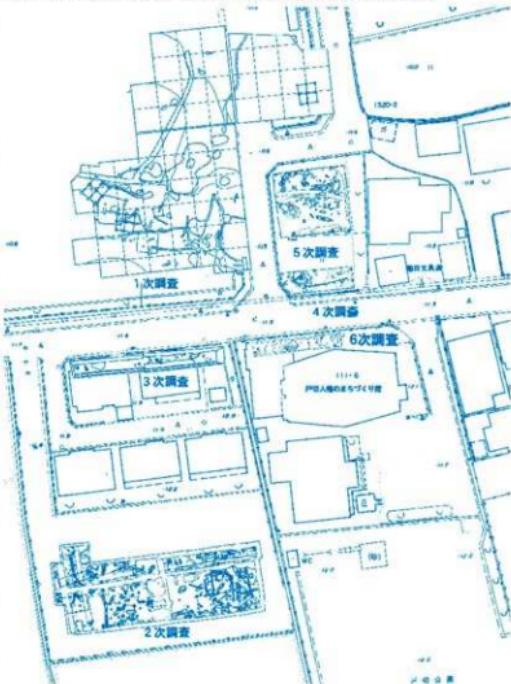


Fig. 2 戸切遺跡の調査地点(1/1000)

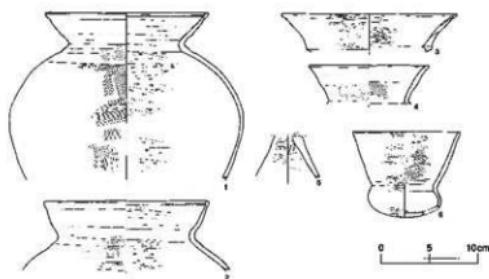


Fig. 3 第5次調査出土の古墳時代中期の土師器(1/6)

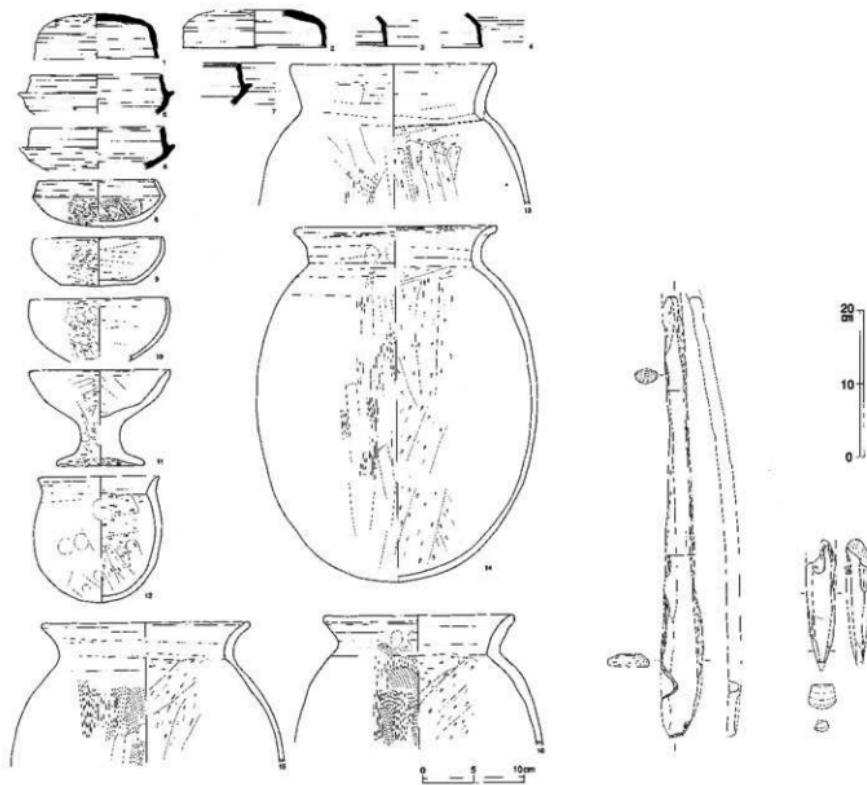


Fig. 4 第5次調査051(津井)出土の古墳時代後期の土器と木製品(1/6)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

ここで報告する戸切遺跡第6次調査地点は戸切遺跡の東縁辺部付近に位置している。戸切遺跡は南北方向の沖積微高地に立地する遺跡の一つで、これまでの調査で古墳時代中期の土壌（埋葬施設の可能性が高いと考えられる）や後期前半の集落関連遺構などがみつかっている（Fig. 2～4：福岡市報告書第1081集）。

本調査区の表土は上から、砂質盛土、黒灰色土（水田耕作土）、黄色土（床土）、暗灰色土（水田耕作土）で、GL-90cmで遺構面かつ地山の砂礫混黄褐色シルト層となる（Fig. 4）。戸切遺跡の中央付近、第3次調査地点と第6次調査地点の間には浅い谷があり、遺跡の西部と東部はそれぞれ異なる微高地上に立地しているとみられる。本調査区は東微高地の範囲が主体であり、古墳時代中期の竪穴建物と、古墳時代中～後期の柱穴や溝を検出した。遺構の覆土は主として黒褐色シルトである。竪穴建物は微高地の緩斜面に立地するもので、河川（古墳時代後期以降か）により侵食を受けており、遺構の北西部は消失している。

2. 遺構

検出した竪穴建物（003）は平面形態が東西260cm、南北210cm以上の方形で、深さは15cm前後である（Fig. 7）。貼床層は検出できず、主柱も明確でない。遺構の中央付近に炭化物の分布が認められたが、竈や炉の有無は不明である。南コーナー付近に建物床面からの深さ12cmの土坑を有する。

上層からは古墳時代後期以降の土器が出土しているが（Fig. 8-6～8）、古墳時代中期前半の土師器が床面付近からまとまって出土しており、建物の時期を示す（Fig. 8-1～5）。

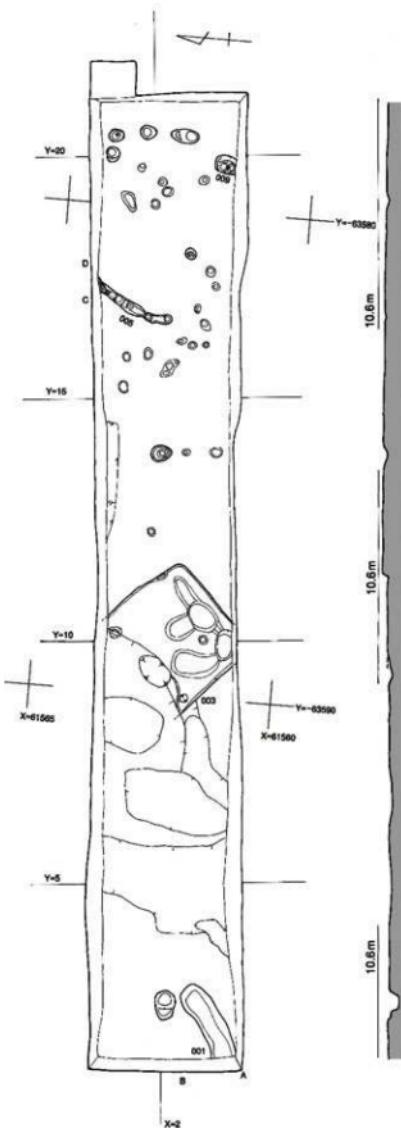


Fig. 5 遺構配置図(1/100)

3. 遺物

出土遺物の総量はコンテナケース1箱分である(Fig. 8)。遺構の時期を示す古墳時代中期から後期の土師器と須恵器が主体である。003出土の1~3は布留式系甕、4は鉢、5は高杯で古墳時代中期前半である。同じく003出土の6は古代の杯・椀の底部とみられ、7と8は古墳時代後期の須恵器杯身、蓋である。

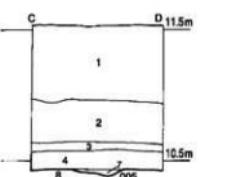
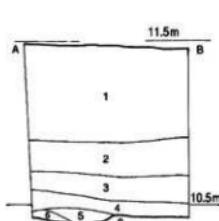
001からは7世紀前半の須恵器・蓋(9)と古墳時代後期の須恵器蓋(10)が出土しており、12~14の須恵器も近い時期のものである。12は脚部に細長方形の透穴を有する高杯、13は壺の脚部、14は甕口縁部である。

混入遺物であるが、縄文時代早期頃の無茎石甕(腰岳産黒曜石)(15・16)や、弥生時代中期前半の甕底部(11)などが出土している。周辺の沖積微高地の形成時期を考えるうえで参考となる資料である。

4.まとめ

戸切遺跡は古墳時代後期前半の集落が中心であるが、中期前半の遺構についても検出例が増えてきた。今回の調査区で当該期の堅穴住居を検出したほか、北部の4・5次調査区では供獻土器を有する埋葬施設である可能性の高い、小判形の土壙3基を検出している。いずれも戸切遺跡東部の微高地上に立地するが、北部が墓域、南部が集落域となっていた可能性が考えられる。また、東450mに位置する上籠遺跡でも河川での祭祀に伴う当該期の土器群が出土しており、周辺の微高地にも同時期の集落が分布している。遺物などからみて、古墳時代中期前半のこれらの遺跡は後期前後の集落に連続するものではなく、短期間で衰退するようである。

戸切遺跡の調査はまだ、ごく一部にとどまるが、古墳時代各時期の遺構の存在が明らかになってきた。古墳時代における沖積平野の開発、近在する野方や羽根戸の古墳群との関係などが今後、問題となってくるだろう。



土層説明

1. 砂質土
2. 黒灰色シルト(旧耕作土)
3. 黄色土(底土)
4. 墓灰色土
5. 緩灰色粘土質
- (001覆土)
6. 緩黃灰色シルト+砂(001覆土)
7. 黑灰色土(005覆土)
8. 砂礫混じりの黄褐色シルト(地山)

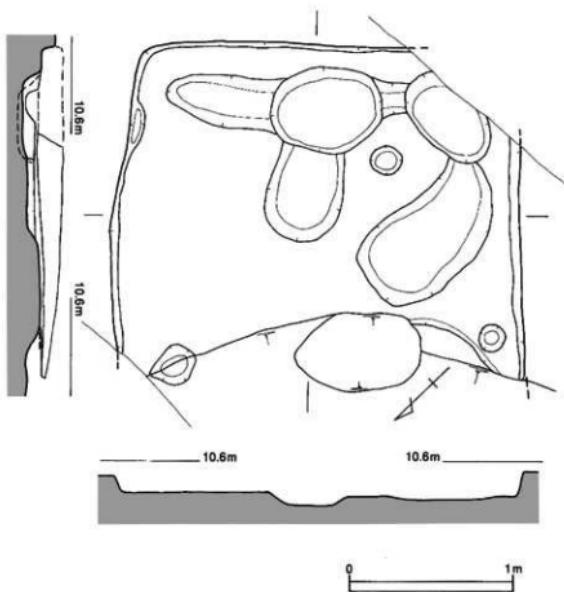
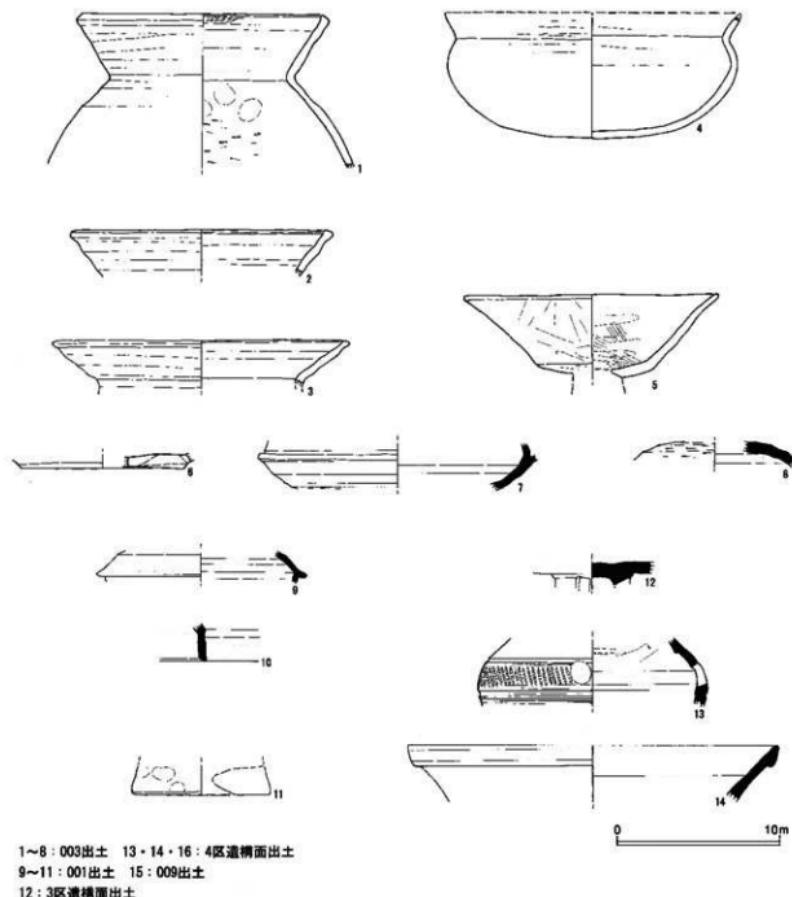


Fig. 6 基本土層図 (1/30)

Fig. 7 003(古墳時代中期の堅穴建物)実測図 (1/30)



1~8 : 003出土 13~14~16 : 4区造精面出土

9~11 : 001出土 15 : 009出土

12 : 3区造精面出土

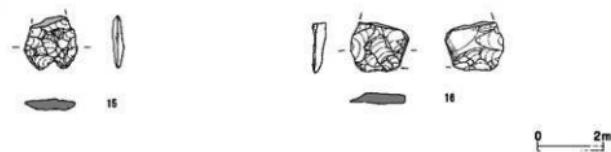


Fig. 8 出土遺物実測図(土器1/3、石器2/3)



Ph. 1 2区全景(東から)



Ph. 2 4区全景(東から)



Ph. 3 1区全景(東から)



Ph. 4 3区全景(東から)



Ph. 5 003 (北東から)

報告書抄録

ふりがな	しどうとぎれとおりせんこうじにともなうはくつちようさほうこくしょ3							
書名	市道戸切通線工事に伴う発掘調査報告書3							
副書名	戸切遺跡第6次調査の報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1152集							
編著者名	森本幹彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-0001 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
戸切遺跡 第6次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくとぎれ3ちょうめ 西区戸切3丁目	市町村 40130	遺跡番号 0402	33° 33' 10"	130° 18' 54"	20110509 ～ 20110520	62	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
戸切遺跡	集落	古墳時代中期	堅穴建物、溝、柱穴	弥生土器・上師器 須恵器、石器			古墳時代中期前半の 堅穴建物	
要約	戸切遺跡は古墳時代後期前半の集落が中心であるが、今回の調査では古墳時代中期前半の堅穴建物がみつかり、遅る時期の遺構分布が明らかになってきた。戸切遺跡東部の微高地上では、古墳時代中期前の遺構が、北部は墓域、南部は集落域として分かれて分布していた可能性がある。							

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1152集
市道戸切通線工事に伴う発掘調査報告書3

—戸切遺跡第6次調査の報告—

2012年(平成24年)3月16日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
印刷 高良印刷